

地で日光がよくあたり、食草であるスマレも多く生えているが、幼虫の成長するところは、ワラビやその他の草で表面が覆われ、幼虫の生活にとって理想的な環境となっている。

おわりに

(オオウラギンヒョウモンを絶滅から救うために。)

近年オオウラギンヒョウモンは絶滅寸前の状態まで個体数を減じた。その原因を考えてみる。

まず考えられるのは、ヒョウモン類が生活するのに適した草原が非常に勢いで減少し、生活の場を失ってしまったことであろう。

地型的に準平原等で排水が悪かったり、火山灰土等土質が悪く、樹木が生育出来ない所が、過去には広い面積で草原になっていた。このような所は近年ほとんど開発され、ゴルフ場、別荘地、住宅地等になってしまった。

河川敷や堤防等も昔から定期的に草刈りや火入れが行なわれていたため、樹木は生育出来ず、人工的草原となっていたが、ほとんどの場所は改修され、コンクリート、張ブロック、芝生等で整備され、残された所は人手が入らなくなったため、雑木が密生している。

兵庫県内で現在草原が残されているのはスキー場等何らかの理由で定期的に山焼きや草刈りが行われているごく限られた区域である。オオウラギンヒョウモンもこのような所でほぼそと世代を繰り返している。

近年本種の個体数の減少が採集熱をあおり、7月下旬羽化した早は産卵することなく採集されてしまう。

本種はスマレ類のうち最も広く今布するタチツボスマレ、ニオイタチツボスマレを好まない。幼虫の期間も長い。秋になるまで産卵しない。生態的に不利な条件は多いがこれらを多産で補って来たのであろう。

虫を愛する者が種の絶滅に手を貸すことになっている現状を反省しなければならぬ時期が来ている。

#### 参考文献

- 近藤伸一 (1981) 兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて。  
(てんとうむしNo.7 102~105)
- 近藤伸一 (1982) 兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(II)  
(てんとうむしNo.8 181~185)
- 近藤伸一 (1984) オオウラギンヒョウモン1776卵を

産卵 (ひろおびNo.7 34)

師尾 武 (1981) ウラギンスジヒョウモン幼虫の食草嗜好性について

(インセクト Vol.32 No.1. 10-12)

(S.62: Shinichi Kondo 神戸市 )

## モンキアゲハの翅脈異常

山本 健一

8月27日に孵化したモンキアゲハの幼虫を飼育した処、羽化した6頭のうち2頭に翅脈異常個体を認めたので報告する。

1頭は後翅両側の第6脈が消失し第5・第6翅室の白斑が癒合している。

もう1頭は左側のみ同様の異常を認めた。同個体の右側は発育不良或は羽化障害による変形と思われる。

終りに卵を譲って載いた木村三郎氏に心より御礼申し上げる。

写真I. 26. X. 1984 羽化

写真II. 3. XI. 1984 羽化

(S.79: Kenichi Yamamoto 姫路市 )

